

タイトル：勝利と敗北 メンタルの強化 Ganar y perder La fortaleza emocional

著者 ビセンテ・デル・ボスケ Vicente del Bosque
出版社：プラタフォルマ Plataforma Editorial
出版年：2015
ページ数：184
読者対象：サッカーファン、スポーツ指導者、一般
レポート作成：長神未央子

概要：

ビセンテ・デル・ボスケが自身のサッカー哲学と人生哲学のすべてを本書で初めて語る。長年の選手生活、監督としてのエピソード、サッカーに対する彼の情熱。クラブや代表チームが切望するすべてのビッグタイトルを持つデル・ボスケの、人間として、そしてプロとしての真価がわかる一冊である

目次

1. 原点
2. 勝利の時
3. 敗北の時
4. 努力 勝っても負けても
5. メンタルを作るもの
6. 勝利と敗北のスペイン
7. 勝利にはどれほどの価値があるか？
8. メンタルの強化
9. カシージャス 勝利の中で敗北した男
10. サッカーを守るディフェンダー
11. 罰の適用と忍耐
12. 名声
13. 家族
14. 友人
15. 引退

内容

1. 原点

著者ビセンテ・デル・ボスケはサラマンカ出身で、レアル・マドリード下部組織（カンテラ）に入団、期限付き移籍でカステリオン、コルドバを経てレアル・マドリードで11年間プレーし33歳で現役引退した。その後レアル・マドリードのカンテラで16年間責任者を務めレアル・マドリードの監督になった。トルコのベシクタシュの監督を経て現在はスペイン代表監督だ。本書は彼のサッカー哲学や、勝利や敗北にどのように向き合ってきたか、一人称で語った本である。

2. 勝利の時

勝っても負けても、同じように心の平静を保たなければならない。著者はレアル・マドリードでの現役時代、勝てると思っ込んではいけないということ学んだ。監督になった時も、勝った時にはその勝利を相対化し、負けた時には努力の価値に目を向けさせるようにした。勝っても負けてもその翌日に監督が控えの選手を気にかけることが重要である。

3. 敗北の時

負けた時にいつも心がけているのは敗北の犯人探しではなく自省すること。監督は負けた時にはその責任を引き受け、そこから組み立て直すことが大切である。FIFAワールドカップブラジル大会でチリに負けてグループリーグ敗退が決まり、連続優勝の望みが消えた。次のオーストラリア戦まで辛く苦しい5日間だったが、チームの士気を立て直しオーストラリア戦に勝利した。敗北からチームは大きな成長を遂げ、非常に実りある5日間となった。

4. 努力 勝っても負けても

相手の力量を甘く見ると痛い目にあう。代表チームでは特に親善試合の戦い方が難しい。チームがスポーツの面だけでなく人間的にも団結することが重要だ。よく機能しているチームというのは、多様性があると同時に、ひとつ共通した哲学で強く結び付いているチームである。

5. メンタルを作るもの

感情はすべての中心である。監督は試合前に選手たちのモチベーションを高めることが重要だ。想像力豊かで即興力も高くなければならない。選手を引き付ける力が必要なのだ。

6. 勝利と敗北のスペイン

この10年でスペインサッカーは大きな成長を遂げた。UEFA欧州選手権で優勝した時の優勝パレードに集まった人々はクラブチームではなく代表チームのユニフォームを着て祝い、スペインが歴史的な経済危機に見舞われる中サッカーが国民の一体感を生んだことを誇りに思った。代表チームはスペインのあらゆる地域からなるひとつのスペインなのだ。

7. 勝利にはどれほどの価値があるか？

勝つことは大事だが同時に模範的にふるまうよう努力すべきだ。反スポーツ的な行為は若者に影響しやすい。フェアプレーを徹底するには罰よりも対話を重視する方がよい。

8. メンタルの強化

監督はリーダーであるべきだし、選手の尊敬を得るべきだ。良きリーダーであるためには理論よりも実践が大切で、自分が模範とならねばならない。公平で良識ある行動を取る。すべての選手を観察し、常に平静を保つことが重要である。

9. カシージャス 勝利の中で敗北した男

イケル・カシージャスは9歳でレアル・マドリードのカンテラに入団し、クラブチームでもスペイン代表チームでも多くのタイトルを手にした。そんな黄金時代の中、チームに大きな貢献をしたにもかかわらずレアル・マドリードから退団することになった。カンテラに入った9歳のころからカシージャスを知る著者は、カシージャスのことを謙虚で人間的にも素晴らしく、代表チームでのキャプテンとしての働きも模範的、いつもチームのために行動していたと語り、カシージャスの今後の活躍にエールを送る。

10. サッカーを守るディフェンダー

サッカーに対してロマンを持ち情熱的でなければならない。サッカー選手・関係者はサッカーを守っているのである。だからサッカーを汚すようなこと、例えば審判に抗議したりサポーター同士で争ったりするのは厳に慎むべきである。

11. 罰の適用と忍耐

著者はクラブチームでも代表チームでも選手に罰を課したことがない。コミュニケーションが重要。選手が自分の扱いに不満を述べてくることもあるが、その時には選手の言い分を聞くことに徹する。チームを率いる時には忍耐強くなければならない。

12. 名声 13. 家族 14. 友人 15. 引退

これら4章では著者のプライベートについて語られる。12章では式典に出席したり街で一般の人に写真を撮られたりするのが恥ずかしいというシャイな一面、13章では3人の子どもたち、特にダウン症の次男アルバロとの関係を通じて父親としての一面が描かれる。14章では友人たちとの交流や本人が「一番の友人」とする妻の取り上げ、15章では2016年欧州選手権後に代表監督を辞任しスペインサッカー協会からも引退すると明言、引退後は家族とゆっくり過ごすつもりだとしめくくっている。

所感・評価

サッカーファン待望の一冊が登場した。著者のビセンテ・デル・ボスケは、レアル・マドリード監督時代に国内リーグ優勝やUEFAチャンピオンズリーグ優勝など、チームに数々のタイトルをもたらした。その後就任したスペイン代表監督としては2010年FIFAワールドカップで悲願の初優勝を勝ち取り、2012年UEFA欧州選手権でも優勝を果たし、チャンピオンズリーグ、ワールドカップ、欧州選手権の三冠を達成した。サッカー史上、初のことである。本書で触れている通り2016年欧州選手権後に代表監督を辞任する意向であり、本書は彼の50年以上に及ぶ長いサッカー人生の総決算といった内容だ。2014年に『評伝デル・ボスケ ス페인代表、南アフリカW杯優勝の真実』（ルーカ・カイオリノプレジデント社）が邦訳されているが、本人をよく知る人々へのインタビューで構成され、本人自身が語る部分は少ない。その点、本書は一人称で彼のサッカー哲学がたっぷりと語られている。タイトルに『勝利と敗北』とあるように、勝利だけでなく敗北から学ぶことの重要性を訴えている。また「私」の代わりに「我々」を多用し、常にスタッフが一丸となってチームの仕事をしている様子がうかがえる。随所に散りばめられた新旧スター選手のエピソードは、日本のサッカーファンにも興味深い。日本でも人気の高いイケル・カシージャスについては、その人柄やレアル・マドリードからの事実上の追放となった退団までを一章まるごと使って語り、日本の読者の関心をかき立てる。

サッカーの技術面・戦術面への言及は少なめだが、カンテラで長くジュニア世代の育成に携わった経験から、人間

的な成長を重視し模範的にふるまうことを繰り返し主張。デル・ボスケの哲学は、サッカーをはじめとするジュニアスポーツや中高生の部活動の指導のみならず、企業の人材育成においても大いに参考になるだろう。

試訳(5. メンタルを作るもの 冒頭から)

あらゆるものの中心にあるのが感情だと思う。私は自分の感情がどのような状態にあるか3日ごとにチェックしている。モチベーションをマラソンのように長続きさせることについては前に述べたが、感情のチェックはそれと関係する。人を動かすものには、金、名声、社会的認知、そして単純に良い仕事をしたいからなどさまざまなものがある。ある時だけモチベーションが高くなるのではなく、一年を通じてすべての試合に同じモチベーションで挑まなければならない。格下の試合などないのだ。

例えば、ワールドカップ決勝前の我々コーチ陣は、シンプルにして率直、的確で、感情豊かであった。そう、感情豊かだったのである。感情がすべての中心なのだから。2012年欧州選手権の決勝前、私は選手たちに向かって、長い間取り組んできたことを信じている、疑う余地はない、と話した。選手たちのモチベーションを試合前に高めることが重要なのだ。感情を揺さぶるような話をする。サッカーに対するロマンを抱かせ、国を守るのと同じようにサッカーを守らなければならないと示すこと。より若い選手の話をし、若い選手の模範になれと話すこと。選手は我々の言ったことを決して忘れない。そして、選手の言うことに耳を傾けること。私には選手の話の聴く力がある。これはチームを率いる上で重要なことだ。

選手を褒めるということは監督の弱さの証のように言われるが、私はそうは思わない。すべての選手が自分は監督に尊重され自分の努力が認められていると感じるようにすべきだ。例えばワールドカップ南アフリカ大会で初戦のスイス戦に負けた時、我々はセルヒオ・ブスケツのことを褒めた。褒めるのに完璧なタイミングだった。もっと後に褒めても効果はなかっただろう。初戦に負けたのは辛く苦しいことだ。しかし我々はパニックに陥らなかった。このような厳しい時を選手の心の成熟とパーソナリティで乗り越えることが重要だ。このワールドカップでついに優勝を果たしたが、このブスケツを褒めた出来事は優勝への鍵となる瞬間だった。

我々が取るべき行動は敗北の犯人探しをすることではない。もし敗北の責任者がいるとすれば、それはチーム全員である。我々はワールドカップの本戦まで進んだのだ。それまでにしてきたことを何も変える必要はない。ずっと選手たちを信頼してきたし、負けた次の試合でもほぼ同じメンバーで戦うことで、選手たちへの信頼を示すことができる。自信を取り戻すことがその後の試合への基本的な課題なのだ。

自尊心強化の鍵は、自尊心をどう扱うかだ。繰り返しになるが、サッカーにおいてはどう説明してよいかわからない時、それを正当化するために「油断していた、モチベーションが足りない、不注意だった、戦う姿勢が足りなかった」など、ありとあらゆる言い訳が持ち込まれる。だがそれは多くの場合、心の問題ではなくサッカーの問題なのだ。個人のモチベーションをチームのモチベーションに変えなければならない。簡単なことではないが、努力を認め、達成すべき目標を示し、調子の良い時もあまりよくない時も選手と分かち合う、それが、常にやり続けなければならない監督の仕事である。

Source URL:

<http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/taitorusheng-li-tobai-bei-mentarunoqiang-hua-ganar-y-perder-la-fortaleza-emocional>